

鼻腔高流量酸素療法を希望した患者との関わり —在宅への初導入を目指して—

岩田 大樹¹⁾ 村中 浩美¹⁾ 大門 由紀子¹⁾
長瀬 太規²⁾ 阿久津 隆³⁾ 芝 寛志⁴⁾
細江 敦典⁵⁾ 西尾 優⁵⁾

- 1) 高山赤十字病院 2病棟5階
- 2) 高山赤十字病院 臨床工学課
- 3) 高山赤十字病院 リハビリテーション科
- 4) 高山赤十字病院 医療社会事業課
- 5) 高山赤十字病院 内科

鼻腔高流量酸素療法（以下NH F）は、適切な加温・加湿と高流量の酸素投与が可能などの利点がある。当院でも、近年様々な病態の患者に使われている。今回、在宅でのNH F導入を希望した患者に、多職種がチームとなって取り組み、在宅でNH Fを導入できた症例を報告する。

症例は、A氏40歳代男性。間質性肺炎と診断され在宅酸素療法（以下HOT）を導入していたが、感染増悪や呼吸困難感の増強、CO₂貯留により入退院を繰り返していた。酸素療法のみでは限界と判断されたA氏に対し、今後の方針について検討された。非侵襲的陽圧換気療法（以下NP P V）は気胸のリスクがあり使用出来ないと判断され、入院中はNH Fを使用し、状態が改善したら、再びHOTで生活する方針となった。NH Fの導入は抵抗なくでき、呼吸困難感の改善を認めAD L拡大に繋がった。徐々に悪化していく自分の体の変化を感じたA氏は、家で家族と長く過ごすためにはNH Fが欠かせなく、NH Fを家に持って帰りたいと希望された。しかし、今まで当院でも当地域においても在宅でNH Fを導入した症例がない。私達は、そんなA氏の強い思いを知り、様々な考えられる問題点に対して、医師、臨床工学技士、理学療法士、退院調整課などの多職種と連携し、在宅へのNH F導入の検討や調整を図った。さらにA氏のニーズに答えられるよう家族の協力や地域との連携を行い、チーム医療の関わりを保ちながら在宅へのNH F導入を実現することができた。

キーワード：鼻腔高流量酸素療法（NH F）、在宅酸素療法（HOT）、チーム医療

Accident Newsに対する当院の取り組みの現状評価と課題 ～Accident News の振り返りから～

若田 きみ子¹⁾ 上野 博子²⁾ 大西 一彦³⁾
宮部 将幸³⁾ 西尾 優¹⁾

- 1) 高山赤十字病院 医療安全推進室
- 2) 高山赤十字病院 看護部
- 3) 高山赤十字病院 医療安全推進課

2010年5月から日本赤十字社（本社）より「本社に報告された医療事故・紛争のなかから、全施設で注意を要するもの」につきAccident Newsの配信がある。これは、関係職員で情報を共有し、医療事故再発の防止策の強化ができるようにとのメッセージがある。

当院においては、Accident Newsの報告を受けてからMR M委員会・RM会議・看護師長係長会議等での伝達を行っている。しかし、その後の当院における取り組みがどこまで実施されているのかの評価が行われていないのが現状である。そこで、Accident Newsの院内での活用について調査し、今後の医療事故再発防止対策の取り組みを行う上での一助としたい。

2010年5月から本社より配信のあった、Accident News No.1～No.11について、当院で行っている対策の現状を調査する。また、当院の対策の見直しを行うきっかけとする。聞き取りの結果をもとに、Accident Newsの伝達方法、当院における今後の対策の立案見直しを行い、その結果から特に管理面において不明確な点などを明らかにする。

この取り組みから、自施設での医療事故・紛争に関しての対策立案・職員間での情報共有・実践・評価・修正は必要であることを知ることができ、院内の取り組みについての管理方法を見直すきっかけとする。